

る。私は、飼育頭数を減らして、出たふん尿は畑の土に戻して循環させた方がいいと考えている。

一 国も方向性を出して推進する有機農業だが、高い栽培技術が必要な印象がある。

泉 父の代から始めたが年によって波があり、手作業が多いが確実に取れるわけではなかった。一緒にいろいろな所へ行って勉強してきた。土の中の微生物が豊かなことが大事で、根の張り方も違ってくる。作物を健康に育てることで収量も安定してきた。かけた愛情に対して、作物が応えてきてくれると年々感じるようになっていく。

課題は除草で、手作業になるのでトラクターの何倍もの時間がかかり、人手を確保しないといけない。共済制度などの補償がないのも課題。ただ、ニンジンやタマネギなど一般的には除草剤が必要な作物ほど、有機のものが消費者から求められる。有機野菜の会員制定期宅配サービスや学校給食などに出荷しており、楽ではないがやりがいは大きい。



いずみ農園で行われた農業体験で有機タマネギを収穫する子どもたち。消費者との接点づくりにも取り組んでいる

一 課題克服に向けた技術開発は。

相馬 農薬を使わない防除法については研究が進んでいる。例えば夜間の畑に黄色LEDを照らして夜行性の害虫の動きを抑える試みや、紫外線を使ったうどんこ病の防除、コウモリが出すのと同じ超音波を使った害虫対策などがある。どうやって一般化できるかが試験場に求められているが、泉さんの話を聞いて

て有機農業の実践の中にそのヒントが含まれているのではと思った。

一 環境に優しい農業を十勝でどう取り入れていったらいいか。

泉 十勝は農業基地として生産量は確保できているが、栄養価はどうなのだろうか。一軒一軒の農家が農薬や化学肥料を減らし、少しずつ有機質の肥料を増やしていけば、十勝全体が変わっていく。国も環境保全型農業に補助金を出しているのでも、上手く活用してほしいと思う。世界的にオーガニックが普及する中で、単なる流行ではなく栄養価が注目されて広がっていけばいい。有機農業、特別栽培農業が営農の選択肢になるように、とかちオーガニック振興会でも考えて発信していきたい。

吉川 自然の力を最大限に引き出す農業を目指さないといけない。足寄町にも遊休地があるが、活用することで温暖化防止につながり、農家の経営改善にもなる。北海道の酪農というイメージする人が多いが、実際は違うということが理解されていない。環境に優しい農業を進めて、都市部の人とタッグを組んで信頼関係を築きながら持続可能な農業をしていかなければいけない。

相馬 十勝農業は日本、北海道の中で飛び抜けたトップの存在。その役割とは生産することだけでなく、持続していくこと自体が日本にとっての共有財産なのでは。農業試験場としてはお役に立てる研究をしていかなければならない。現在の農業で大成功しているが、そこが持続可能な農業に取り組みれば、他の地域にとって大きなインパクトになる。日本や世界にとっても十勝が取り組む意義は大きいと思う。